

NRPA レジャー研究シンポジウム抄録にみる  
レジャー・レクリエーション研究動向(1995～2000年)

○栗原邦秋(余暇問題研究所) 高橋 伸(国際基督教大学) 高橋和敏(余暇問題研究所)

### I はじめに

本研究は、本学会第25回大会('95年9月23・24日開催)において発表した研究を継続したものである。研究を開始するに至った動機は、1) 先行研究掌握の重要性を鑑み、その利便性向上に寄与すること、2) レジャー・レクリエーション研究の方向性に関する示唆を得ることであった。本研究に類似する研究には、矢川ら('81)、大森ら('82)、北米の研究では Riddick ら('84・'91)、Valerious ら('92)、Bedini ら('92)によるものがあつた。

### II 研究目的

本研究の目的は、「'95～2000年に開催された全米レクリエーション・公園協会年次総会に含まれる研究シンポジウムにて発表された諸研究を整理・分析することによりその方向性を得ること」とした。各研究に対する評価には及んでいない。

### III 研究方法

- 1)'95～2000年に開催された NRPA 研究シンポジウム抄録集の入手。
- 2)合計研究数 579 題の各抄録から整理・分析に必要とする項目を抽出しカード化した。
- 3)研究の領域分類は NRPA 研究シンポジウムの形式に従った。
- 4)分析項目は、①研究領域別の傾向、②数量的研究と質的研究の傾向、③研究方法(統計手法を含む)、④研究者の所属、とした。

### IV NRPA とレジャー研究シンポジウムについて

National Recreation and Park Association (全米レクリエーション・公園協会)は、1966年1月にレクリエーション運動推進を目的に関連する団体を統合して設立されたサービス団体である。本部を Virginia 州 Ashburn('97年6月新築移転)に置き、ブランチならびにセクションとして 10 団体を傘下にもつ。その母体の歴史は古く、1906年 National Playground Asso.の設立、1911年 Playground and Recreation Asso.と改称、さらに 1930年 National Recreation Asso.となり現在に至っている。公園に代表される"ハードウェア分野"と研究・教育者および専門実践家の"ソフトウェア分野"の統合に大きな特徴がある。年次大会は毎年10月に開催される。これに並行して SPRE 主催の Research Symposium も含まれ、他の関連分科会、大規模な展示会が開催される。過去6回の開催は'95年テキサス州サンアントニオ、'96年ミズーリー州カンサスシティ、'97年ユタ州ソルトレイクシティ、'98年フロリダ州マイアミ(ハリケーンのため中止)、'99年テネシー州ナッシュビル、'00年アリゾナ州フェニックスであった。

### V 結 果

表-1 年次別 研究領域分類数と発表研究数

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	延数
分類数	10	11	14	18	21	23	66
発表数	125	82	101	101	98	72	579

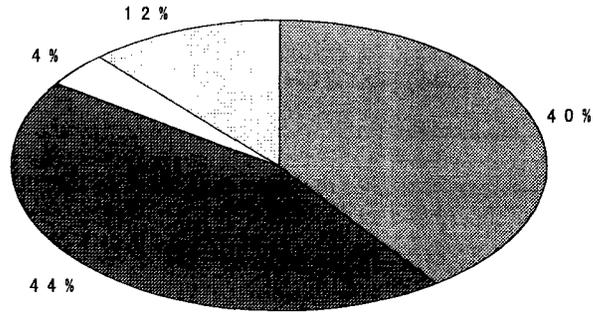
表-2 発表数の多い研究領域

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	合計
野外レクリエーション： 計画・マネジメント	22	11	—	—	—	—	33
心理/社会学的 レジャー行動の様相	21	7	—	—	—	—	28
生涯レジャーの様相： 子供から高齢者	20	8	—	—	—	—	28
観光・旅行と レジャー研究	14	12	—	—	—	—	26
青少年レジャー	—	—	8	11	6	—	25
レジャープログラム サービスとマネジメント	16	8	—	—	—	—	24
少数民族・弱者グループ 女性と高齢者	—	—	8	7	4	2	21
臨床と地域に焦点を置く 少数派へのレジャー	9	8	—	—	—	—	17
レジャー行動研究における 方法論・統計学・デザイン	8	7	—	—	—	—	15
研究方法の 熟考と吟味	—	—	—	7	3	3	13
社会学的レジャー行動に 関する研究	5	8	—	—	—	—	13
性差とレジャー	—	—	—	8	4	—	12
野外レクリエーション経験	—	—	—	4	8	—	12
観光	—	—	3	4	5	—	12
マーケティング	—	—	5	—	4	2	11
家族と人間関係における レジャー	—	—	—	4	4	3	11

表-3 量的研究と質的研究の比率

(%)

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	延数
量的	88 (70.4)	52 (63.4)	57 (56.4)	60 (59.4)	53 (54.1)	39 (54.1)	349 (60.3)
質的	32 (25.6)	28 (34.2)	41 (40.6)	37 (36.6)	40 (40.8)	31 (43.1)	209 (36.1)
複合	5 (4.0)	2 (2.4)	3 (3.0)	4 (4.0)	5 (5.1)	5 (2.8)	21 (3.6)
合計	125 (100.0)	82 (100.0)	101 (100.0)	101 (100.0)	98 (100.0)	72 (100.0)	579 (100.0)



■一般統計 ■多変量解析 □その他 □不明

図-1 量的研究における分析方法

表-4 所属機関別の研究発表者数 (%)

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	合計
大学	111 (88.8)	75 (91.5)	94 (93.1)	96 (95.0)	96 (98.0)	69 (95.8)	541 (93.5)
行政	6 (4.8)	4 (4.9)	3 (3.0)	2 (2.0)	—	2 (2.8)	17 (2.9)
民間	8 (6.4)	3 (3.6)	4 (3.9)	3 (3.0)	2 (2.0)	1 (1.4)	21 (3.6)
合計	125 (100.0)	82 (100.0)	101 (100.0)	101 (100.0)	98 (100.0)	72 (100.0)	579 (100.0)

表-5 量的研究における所属機関別の研究発表者数 (%)

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	合計
大学	80 (91.0)	47 (90.4)	52 (91.2)	59 (98.3)	53 (100.0)	38 (97.4)	329 (94.3)
行政	4 (4.5)	2 (3.8)	3 (5.3)	1 (1.7)	—	1 (2.6)	11 (3.1)
民間	4 (4.5)	3 (5.8)	2 (3.5)	—	—	—	9 (2.6)
合計	88 (100.0)	52 (100.0)	57 (100.0)	60 (100.0)	53 (100.0)	39 (100.0)	349 (100.0)

表-6 質的研究における所属機関別の研究発表者数 (%)

年次	1995	1996	1997	1998	1999	2000	合計
大学	28 (87.5)	26 (92.9)	40 (97.6)	33 (89.2)	38 (95.0)	29 (93.6)	194 (92.8)
行政	2 (6.25)	2 (7.1)	—	1 (2.7)	—	1 (3.2)	6 (2.9)
民間	2 (6.25)	—	1 (2.4)	3 (8.1)	2 (5.0)	1 (3.2)	9 (4.3)
合計	32 (100.0)	28 (100.0)	41 (100.0)	37 (100.0)	40 (100.0)	31 (100.0)	209 (100.0)

## VI 1995～2000年 NRPA Research Symposium における研究動向と特徴

1. 研究領域分類数が年々多くなり、細分化ならびに拡大の傾向にある。とくに 1997 年以降よりその傾向は顕著となっている。
2. 1995 年および 1996 年では、分類数が少ないことにも関係するが、「野外レクリエーション」「生涯レジャー」「心理/社会学的レジャー行動研究」「観光・旅行とレジャー研究」の分野に多くの研究が集中的に発表されている。
3. 1997 年以降では、単一の領域に対して 10 題以上の発表はおよそみられない。
4. 1997 年以降で、「少数民族・弱者グループ」の領域における発表がコンスタントに継続されている。
5. 「レジャーと青少年」「レジャー・マーケティング」「観光」ならびに「家族と人間関係」の領域においても比較的コンスタントな研究がなされているといえる。
6. 2000 年においては 23 領域分類に対して合計 72 題の発表数であった。これはシンポジウムにおける 1 題当りの発表時間を延長したことによる制限とされる。
7. 「量的研究」と「質的研究」の発表数を対比すると、依然「量的研究」が数的にも優位であるが、「質的研究」の増加傾向も伺える。（質的研究の奨励を唱える研究発表もあった）
8. 「量的」「質的」の両面をもった「複合的研究」も少数ながらコンスタントにあった。
9. 「量的研究」における分析手法では多変量解析法が圧倒的に多かった。2000 年では 50% に達している。その主流は、「回帰分析」「分散分析」「重/共分散分析」などで、「有効性・信頼性の検証」にまで及ぶ研究もあった。
10. 研究発表者の所属では、圧倒的に大学に所属している者が多かった。「量的研究」「質的研究」の対比においても概ね同様の傾向であった。

## VII まとめ

本研究により、近年の北米におけるレジャー・レクリエーション研究動向の概要を把握することができた。しかし、これは広範に行なわれているであろう諸研究の一端を概観したに過ぎない。他の媒体において発表される、例えば *Journal of Leisure Research* 誌などに掲載される諸研究についても網羅するなどして本研究の意義の向上を図りたい。

本研究をすすめる過程において 579 題の研究抄録を通読した。どれも実践的な意義を目的に掲げて取り組んでいることが強く印象に残った。